

明代における救荒作物著述考

天野元之助

はしがき

- 一、朱橚『救荒本草』二卷
- 二、王磐『野菜譜』一卷
- 三、滑浩『野菜譜』一卷
- 四、姚可成『救荒野譜』一卷
- 五、高濂『野藪品』一卷

はしがき

- 六、周履靖『茹草編』四卷
- 七、鮑山『野菜博錄』三卷
- 八、屠本峻『野菜箋』一卷
- 附、顧景星『野菜贊』一卷
- むすび

明代(1368—1644)は、自然災害の極めて多かった朝代で、その二七六年間に災害一、〇一一次^注に達し、前代未曾有とさ
れている。

註 水災一九六次、旱災一七四次、地震一六五次、雹災一一二次、風災九七次、蝗災九四次、歉飢(凶年)九三次、疫災
六四次、霜雪之災一六次、合計一、〇一一次——鄧雲特『中国救荒史』一九五八年刊、二一ページによる。

こうした災害に際し、野生植物を利用して救荒に対処すべく、広範な探索がおこなわれ、又それを取り纏めた著述が、少
なからず上梓された。左にこれらの著述、ならびに其の版本について、私の調べたところを記録に止めておく。

一 朱楠『救荒本草』二卷(文四卷、八卷)

撰者は、明の太祖朱元璋の第五子で、成祖朱棣(太祖の第四子)の同じ母から出た実弟であり、洪武十一年(1378)周王に封ぜられ、洪熙初年(1425)定と諡されたので、周定王楠シヨクともいう。

ちなみに李時珍の『本草綱目』や徐光啓の『農政全書』は、この書を周憲王の撰とするも、それは誤りである。周憲王は、定王の子朱有燾である。

彼は日頃、学を好み、河南省の開封(汴)に移つて以来(洪武十四年1381)、王府の人たちをして野生の可食植物(救荒植物)を探し求めて、それを王府の植物園に植え、また救荒の用をなす栽培作物(草・木)とともに、その滋長・成熟したところを画工に描かせ、ここに四百十四種の草木を採り上げ、これを本草書にあつて其の有無を検し、従来の本草書の体裁に従つて、紙面に大きく絵図を出し、その左に産地・形態・可食部分・味を誌し、次に「救飢」と朱書して、その食べ方(調理法)を述べ、そのあとに「治病」と朱書して、本草にみえる個所などを録した。

尤も「治病」の項は、旧本草に無い新增のものには、殆んど附されていない。

ちなみに其の草木の絵図は、十五世紀の初めに描かれた植物絵図としては、実に立派なもので、定評がある。

なお彼は、『普濟方』四百二十六巻を編集しており、これは中国史上もつとも巨大な「薬局方」であり、

この書は、一九五九年人民衛生出版社から、『四庫全書』本に拠つて、十冊の活字本として再び世に出たのである。そして彼が『救荒本草』や『普濟方』を編集していたとき、兄の永楽帝は学者を聘して『永楽大典』の大規模な編集にあたらせていた。

右はさておき、つぎに『救荒本草』開卷第一にのつた「刺薊菜」の文例を示しておく。

〔刺薊菜〕

本草名小薊。俗名青刺薊。北人呼為千針草。出冀州。生平沢中。今処処有之。苗高尺餘。葉似苦荬葉。莖葉俱

有刺。而葉不皺。葉中心出花。頭如紅藍花而青紫色。性涼無毒。一云味甘性溫。

〔救飢〕

採嫩苗葉燂熟。水浸淘淨。油塩調食。甚美。能除風熱。

〔治病〕

文具本草草部大小薊条下。

ちなみに本書に見える救荒植物を日本に生ずる植物に同定する仕事は、後述する本邦学者の著述からうかがわれ、茲にあげた「刺薊菜」は、本邦では「ノアザミ」に同定されているが、北村四郎博士によれば、「莖・葉ともに刺あり、葉皺まらずと云う記述に一致しない。冀州、即ち河北・山西に最も多いものは、「アレチアザミ」・「カラノアザミ」・「カラアザミ」などである。根出葉が叢生することより、先ず「カラノアザミ」に当てる外はない」と。（『日本救荒植物
（再檢）京都帝

国大学理学部植物学教室第三講座、昭和二十一年七月プリント、三二―三二ページ）

そして李濂の『重刻救荒本草序』を借れば、「是の書、図あり、説あり。図は以て其の形を肖せ、説は以て其の用を著わす。首めに産生の壤・同異の名を言い、次ぎに寒熱の性・甘苦の味を言い、終りに淘浸烹煮・蒸曬調和の法を言う。草木・野菜、凡そ四百一十四種、旧本草に見えるもの、一百三十八種、新增のもの、二百七十六種」に及び、草部二百四十五種、木部八十種、米穀部二十種、果部二十三種、菜部四十六種。そのうち葉の食えるもの二百三十七種、実の食えるもの六十一種、葉及び実みな食えるもの四十三種、根の食えるもの二十八種、根・葉の食えるもの十六種、根及び実みな食えるもの五種、根・葉及び実みな食えるもの三種、根及び花の食えるもの二種、花の食えるもの五種、花・葉の食えるもの五種、花・葉及び実みな

食えるもの二種、葉・皮及び実みな食えるもの二種、茎の食えるもの三種、笋の食えるもの一種、笋及び実みな食えるもの一種を挙げている。その際「本草に原有するもの」を先に録し、「新たに増したものを」を後に附している。

(1) 此の書は、永楽四年(1406)秋七月周府左長史^{べん}下同の序を附して、河南の汴(開封)で上梓せらる。(筆者未見)

(2) もつとも此の永楽の初刊本は、嘉靖の頃には、「其の板も亡く」、李濂がようやく開封で善本を訪求して、山西巡撫および同按察使のすすめで、李濂の「重刻救荒本草序」を附して、嘉靖四年(1525)晋(山西の太原)で再刻されることとなる。これも亦、稀覯本であるが、一九五九年中華書局から趙萬里氏の「後記」を附して、鄭振鐸所蔵のものが景印本として上梓された。『中国古代科技図録叢編』初集に輯む)

ちなみにその下巻目録の木部は「一百種」と誌すが、そこに列挙された樹木の名は七十八種しかなく、一々本文に照してみると、目録のなかに二種(実可食の橡子樹と、葉及実皆可食の柘樹)が脱けており、本文では木部八十種が図説され、それは「救荒本草総目」の数と合致する。

此の刊本の植物図は、気品の高い・端正なもので、胡道静君によれば、アメリカの植物学者 H. S. Reed はその著“*A Short History of the Plant Sciences*”, Waltham, Mass., 1942. のなかで、本書に描かれた植物図の精確さを称賛して、その頃のヨーロッパにも此のような良い書は無かつたという。(『我國古代農學發展概況和若干古農學資料概述』(『學術月刊』一九六三年第四期、二六二頁))

(3) つぎに嘉靖乙卯(三十四年1555)、陸東^{ケン}が汴(開封)で第三版を上梓した。この版本は、大阪の武田杏雨書屋に秘蔵され、かつて渡辺幸三君が京都博物館編の『医学に関する古美術聚英』(昭和三十年刊)の解説十九ページで、これを紹介されたことがある。そこに示された二枚の写真版は、これを上記中華書局の影印本と対比して、その差異が見出せない。ところで『四庫全書総目』の提要は、この版で「毎卷又分かつて前後と爲し、共^{あわ}せて四卷と成し、…前に「陸」東の序あり」と

している。

いま中華書局の影印本をみると、此の版本も卷上前・卷上後・卷下前・卷下後の四つに分けていることを附言しておく。

ちなみに此の第三版の陸東の序で、『救荒本草』の撰者を誤つて周憲王とした。そして其の後、李時珍・徐光啓などに踏襲されて、『周憲王救荒本草』として伝えられて来た。これについて、四庫提要は当時、親藩は貴び重んぜられたので、刊書には皆、名を題せなかつた。因つて輾転する間に伝訛したものだとしている。

ところで、其の後、後述する『格致叢書』に輯録された『救荒本草』には、嘉靖壬戌（四十一年1566）の胡乘の序や、嘉靖丙寅（四十五年1566）朱崑の序を載せているから、このときにまたまた上梓されたかも知れぬ。

岡西為人博士にも、お質ねしたが、「嘉靖四一年、四五年度の両本については、手控が全く無く、お答え出来ない」との返書をいただく。（一九六四年三月十三日付書信）

(4)さらに万曆十四年（1586）、李汝の序を附して『救荒本草』二卷四冊本が出た。これは、もと奉天にあつた満洲医科大学に所蔵され、ここに居られた岡西為人博士によれば、これには万曆十四年（丙戌）の李汝「救荒本草序」のあとに、嘉靖四年の李濂「重刻救荒本草序」と嘉靖三十四年（乙卯）の申飴「救荒本草序」をのせ、救荒本草総目、救荒本草上巻目録、下巻目録（每巻首）、本文のほかに、附録として「備荒論」・「救荒説」がみられたと。

この点、岡西為人『続中国医学書目』（昭和十六年六月刊）一四三—一四四ページにのせられ、また龍伯堅『現存本草書録』（一九五七年刊）にも、「救荒本草四卷 明、万曆十四年丙戌（一五八六）刊本」と出ている。

さてここで『四庫全書』に輯められた『救荒本草』八巻八冊本にふれておく。これは、その提要によれば、兩淮塩政使の採進本であつて、それがどの刊本に属するのか、明記していない。

また提要には、陸柬の序が前にある嘉靖乙卯（三十四年）の四巻本のことが出てくる。

私が弥吉光長君の高配で奉天（沈陽）の文溯閣の四庫全書の『救荒本草』をみ、その際後述する『農政全書』（卷四十六）の輯本と対比した記録が、手許に残っているが、それには、本草書に見られるように、絵図の次ぎにある文章中、草名と救飢・治病の題名が朱書されている。そして開卷第一【草部】葉可食は、刺薊菜に始まるとあり、『農政全書』輯本と配列の違ふ個所や絵図の異なるものを指摘したところから推せば、以上のどれかに拠つたのであらう。尤も絵図の写真を撮っていないから、之を対比決定するわけにはゆかない。

(5) また徐光啓は、その『農政全書』（崇禎己卯十二年1639刊）巻之四十六荒政—五十九荒政にこれを輯録し、そして巻之四十五荒政のおわりに、下同の「救荒本草序」と李濂の「重刻救荒本草序」を引いているから、嘉靖四年の李濂刊本に拠つたものように見えるが、彼は『周憲王救荒本草』と題しているし、その絵図が異なり、配列に相違のあるところからして、私は嘉靖三十四年陸柬の刊本より後に出たものに拠つたと想定している。

ところで、此の『農政全書』に輯められたものには、徐光啓の附語（玄扈先生曰……）が五十六カ所も出て来る。

例えば、萱草花ワスレグサの末尾に、「玄扈先生曰。花・葉・芽俱嘉蔬。不必救荒。根亦可作粉。如治厥法。邇歲浡飢。山民多賴之。京師人食其土中嫩芽。名扁穿。花・葉・芽俱嘗過」とある。そして彼の「附語」には、捨てがたい文章を見出すのである。

また果部の条(『農政全書』卷之五十八)では、「詳見樹藝果(蒨)部」として、原文の大半を省略し、「救飢」の文のみ掲げているのが多い。(蒨は草の実をいう)

すなわち果部二十三種のうち、榧子樹・野葡萄・野桜桃・沙果子樹・芋苗の五種のみ、原文を残している。

ところで、徐氏の云う樹藝果部(『農政全書』卷之二十九、三十)の条にあたると、桜桃樹でも柿樹でも梨樹でも、数多くの文献が引かれているが、その中に『救荒本草』の名を見出せず、その文章も出て来ないから、ここでは省略したとみたい。

なお卷之五十八菜部の藟藟菜・莧菜も、「詳見樹藝蔬部」とし、『救荒本草』の文章を略している。

さらに本文中、「救飢」の次ぎに「治病」の項が、原則としてこれまで附されていた。例えば刺薊菜の「治病」の条には、「文具本草草部大小薊条下」とあるが、こういった記載も、ほとんど削除されている。

徐氏輯本には、草零陵香・葦蓴菜・螺麤兒・胡蒼耳・杜当帰・野西瓜苗・透骨草・天茄兒草・無花果・楼子葱の十種に、「治病」の条が残っている。これら「治病」条下の文は、楼子葱を除いて、いずれも「今人伝説……」とか、「今人多以此物代用」とか誌されたものだが、もとの本には、それ以外にまだまだ相当見出され、徐氏の取捨選択の基準が判らない。

ちなみにもとの本の旧本草に無い「新增」の植物の条下に、「治病」の項を欠くものが、かなり存することを附記しておく。

なお又、これまでの刊本には、「本草現有」のものを先にあげ、その初めに此の四字が誌され、新しく増したものをその後におさめて、そこに「新增」と題されて来たが、徐光啓の輯本には、そうした文字が見出せない。しかもその配列のちがつているところが、かなり発見される。

すなわち徐氏輯本の開卷第一に見える野生薑は、嘉靖四年の李濂刊本では第三十七番目におかれ、その他桔梗・猪芽菜・仙靈脾・剪刀股・山梗菜・薔薇・花蒿・透骨草・沙參・百合・草三奈・臘梅花の位置がちがつている。

また徐光啓の輯本には、木部〔葉及実皆可食〕新增の「山穠樹」が脱している（中華書局刊『農政全書』卷之五十六荒政、一二七七ページの青檀樹のあとに来るものである）。よつて茲にその部分の文章を掲げておく。

〔山穠樹〕生密県梁家衝山谷中。樹高丈餘。葉似初生穠葉。又似芙蓉葉而小。又似牽牛花葉。葉肩兩傍却又有角。又開白花。結子如枸杞子。大熟則紫黑色。味甘酸。葉味苦。

〔救飢〕採葉燉熟。水浸去苦味。淘洗淨。油塩調食。其子熟時。摘取食之。

なお木部葉可食の新增の雲桑が、徐氏輯本では雲葉となり、龍柏芽が龍柏芽となつている。（もつとも清の吳其濬『植物名実図考』卷三十四木類には、「雲葉」・「龍柏芽」とす）。

次にその草木の絵図だが、絵自体、嘉靖四年の李濂刊本ほどの立派さは無く、かなり見劣りがする。ところで、木部葉可食の茶樹の絵図には、嘉靖四年刊本には無い茶の花が茶の木の下に描かれているのは、特記すべきことか。しかし一つ一つの絵図を対比すると、石竹子・金盞児花・小桃紅・白蒿・蚵跛菜・雀麦・壩齒花・菱角・邪蒿・後庭花などが、ちがつている。

⑥なお、万曆二十一年（1593）胡文煥によつて『新刻救荒本草』上・下二卷が、『格致叢書』（九十九種本）第一一二―一二五冊に輯められる。それは、百十二種の草木を載せた抄録本であつて、李時珍の『本草綱目』卷一序例上 歷代諸家本草 救荒本草のなかで、「近人翻刻、削其大半。雖其見淺、亦書之一厄也」（近代に及んで、この書を翻刻した者が、大半を削去して了つたのは、極めて不用意にしたことではあろうが、書籍にとつて痛むべき一厄といわねばならぬ）としたのは、此の刻本を指す

のであらう。

これはまた、嘉慶丙寅（十一年1806）張祥雲の重刊『格致叢書』にも輯めるといふ。（未見）

いま東洋文庫所蔵の『格致叢書』所輯本を繙くと、はじめに「救荒本草条例」で「一、此書悉依所刪之本、庶可通行」とし、以下数条、その編集の法を述べて、「胡氏文会堂訂」とある。ついで万曆癸巳（二十二年）錢唐胡文煥の序、永樂四年下同の序、嘉靖四年李濂の序、嘉靖乙卯（三十四年、1565）申饒の序、嘉靖壬戌（四十一年1566）胡乗の序、嘉靖丙寅（四十五年1566）朱崑の序をのせ、「新刻救荒本草上巻目録」が示され、米穀部八種（実可食三種、葉及実皆可食五種）にはじまり、ついで菜部十一種（葉可食六種、根可食一種、葉及実皆可食三種、根及実皆可食一種、果部十三種（実可食八種、葉及実皆可食二種、根可食二種、根及実皆可食一種）、木部十九種（葉可食九種、実可食一種、葉及実皆可食四種、花葉皆可食一種、花葉実可食一種、葉皮及実皆可食二種、笋可食一種）をえらび、まず一ページをつかつて絵図を掲げて、本文におよぶ。その本文も、段下げの文は、「救饑」の条だけ見える。

ちなみに「茶樹 葉可食」の絵図には、『農政全書』にみられるような茶の花は描かれていない。

つぎに「新刻救荒本草下巻 明錢唐胡文煥德父校正」では、草部六十一種（葉可食二十五種、根可食十三種、実可食八種、葉及実皆可食一種、根葉可食五種、根笋可食三種、根及花皆可食二種、根及実皆可食一種、花葉皆可食二種、茎可食一種）をのせ、「上下凡五部通計一百一十二種」をとりあげ、最後に「姪孫光盛」の跋をのせている。

ちなみに京大人文科学研究所、内閣文庫所蔵の『格致叢書』本には、之を闕くし、大連図書館所蔵本には、上巻四葉を闕如していた。

(7) なおこの書は、夙にわが国に伝来し、享保元年（1716）松岡恕庵（玄達成章）が『周憲王救荒本草』（十四巻目一卷）、王西樓輯・姚可成補『救荒筌譜』（一卷）に訓点を施し、和名の考うべきものは、之を記入し、京都の書肆柳枝軒・華文

軒・含翠亭に授けて上木させている。(大阪の武田杏雨書屋藏本による。此の刊本は東京の内閣文庫、西尾の岩瀬文庫、京都の京都大学附属図書館、大森記念文庫にも蔵す)

この刊本は、「周憲王救荒本草」と題し、「徐光啓纂修、張國維鑒定、方岳貢同鑒」と書し、次の行に「荒政 草部葉可食 野生薑」とあつて、それが徐光啓『農政全書』所輯に拠つたことは、明らかである。

尤も此の刊本の巻頭に、万曆癸巳(二十一年)錢唐の胡文煥の序、永樂四年下同の序、孫光盛の跋、嘉靖四年李濂の序、嘉靖乙卯(二十四年)涇水の申澂の序、嘉靖壬戌(四十二年)四川安居県知県貴陽の胡乗の序、嘉靖丙寅(四十五年)滇の永昌の鐵橋山人朱崑の序をのせ、また胡氏文会堂の「救荒本草条例」を掲げている。このうち徐光啓の『農政全書』にみえるものは、下同の序と李濂の序だけで、松岡恕庵は『格致叢書』所輯本にみえる序・跋をここに併載したのである。

(8)ところが、此の版本が、天明八年(1788)の大火で焼けてしまい、平安書林長松堂の依頼に応じ、小野蘭山(職博)が寛政十一年(1799)旧本の誤謬を訂正して、『救荒叢譜』一卷と『周憲王救荒本草』再刻十四卷を上梓すると共に、

この再刻本は、原版を写しぱりして、これに補訂を加えると共に、上掲の孫光盛の跋を、最後にもつて来ている。

『校正救荒本草補遺卷之九』を出し、果部(桜桃樹より苦苣菜まで)の欠文を補足している。(武田杏雨書屋蔵)

すなわち巻末におさめた寛政己未(十一年)春二月の小野蘭山の「再鐫救荒本草跋」に、「旧刻果部有其救飢而畧其形状者、拠農政全書也。今従本書而補之、名為救荒本草補遺。乃補旧刻之遺、以復華刻之旧也云」とみゆ。ところで、其の絵図は、だいたい松岡恕庵本のそれを探り、文のみ嘉靖の刊本に拠っている。

この点、小野蘭山はその跋で明記していないが、いま岩崎常正(灌園)著『救荒本草通解』序をみると、「今和刻ノ救荒本草ハ、本農政全書ニ合刻シタルヲ松岡玄達抜出シテ翻刻ス。是正徳(1711—1716)ノ頃唐本ナケレバ也。其明代における救荒作物著述考 天野

后寛政己未（十一年1799）蘭山先生救荒果部ノ闕文ヲ補再刻ス。蘭山先生ニ云、松岡救荒ヲ翻刻セシ後、唐刻ノ救荒本草二部ヲ載來ル。一本ハ品物〔品類〕二百四十五種ヲ記シ、文正〔シ〕ク図明〔カ〕也。一本ハ品物〔品類〕二百種ニ足ラズ。故〔ニ〕今唐刻ノ正本ニ從テ改正スベシ。正本ハ整テ二冊目錄ヲ序スルモ、和刻ト異ナリ可考。上上下下上下下ト四卷ニ分ツ」：「又按〔ズル〕ニ、今唐刻ノ救荒本草一本アリ。正本ニシテ是即嘉靖乙酉（四年1525）大梁ノ李濂ガ序ニ云、救荒本草二卷永樂之間（永樂ハ定王ノ代ナリ洪熙元年定王卒ス）周藩ノ刻〔スル〕トコロハ板亡〔ビ〕テ後、此ヲ晋ニ刻〔スル〕モノ草木野菜凡四百十四種トアリ、文正図明也。上ノ前・下ノ後・下ノ前・下ノ後ト四卷二分〔チ〕、本草原有・新增・治病等ノ別アリ。刺薊菜ヲ始トス」とある。

ちなみにこれと大同小異の文章は、小野蘭山先生訳説 門人筆記『救荒本草記聞』や、闕名撰『救荒本草會識』（文政四年（1821）三月写）——いずれも武田杏雨書屋所蔵の写本——の巻頭に出ている。

⑨また小野蘭山の孫・蕙畝（職孝）が、祖父の遺命を受けて、口授し、その子彦安（職実）に筆録させた『救荒本草』を仮名交り文で、平易に通解した『救荒本草啓蒙』十四卷四冊本が、天保十三年（1842）衆芳軒から上梓された。（武田杏雨書屋、内閣文庫、岩瀬文庫蔵）

それには、天保十三年菅原利保序、天保十四年龍僊院法印序、天保十三年丹波元堅序のあとに、男 彦安職実の例言があり、目錄をのせて、本文となる。即ち「救荒本草啓蒙卷之一」の下に、「小野蕙畝職孝口授 男 彦安職実録」として、「草之部 野生姜」が始まるが、これには絵図が無い。

さて此の『救荒本草』は、わが徳川時代の学者に強い関心がもたれ、岡西為人博士が私に教えられた文献だけでも、十五種に達している。（一九六四年三月四日の書信）

それは、岡西為人「明治前中国本草の渡来と其影響」『明治前日本薬物学史』第二卷、二五二、二五四—二五七、二五九—二六〇ページに示されているが、私への書翰でこれらの書の出典、所蔵機関を教えらる。

私はそのうちの数種の手抄本を、大阪東淀川区十三にある武田杏雨書屋を訪れて、見る機会をえ、その中で特筆大書すべき岩崎常正（灌園）著『救荒本草通解』八卷・『救荒野譜通解』一卷・『救荒野譜補遺通解』二卷、文政三年（1820）十月二十五日門人森良章・田村守文校（もと黒川真頼）を、ここに紹介しておく。

ちなみに此の書（写本）は、東京の早川佐七氏の植考書屋や東京の帝国図書館（今の国会図書館）にも蔵せられるという。（伊藤純一郎「本草書目抄」昭和三年三月刊、十二ページによる）

いま此の書の序を繙くと、「此正本〔嘉靖の四卷本〕ニ從テ異同ヲ正シ、次第モ又准之、可參看和刻ト図ノ異〔ナ〕ルトコロハ、摸写シテ是ヲ知〔ラ〕シム。〔本書手抄本には、全然絵図を載せていない。〕又玄扈先生ノ文皆刪去〔ル〕ベシ。委ハ各条ニ記ス。又徐春甫医統ニモ救荒一本アリ。是ト相似タリ。救荒本草品物ノ鑒定ハ、稻〔生〕若水・貝原〔益軒〕・松岡〔恕庵〕・〔小野〕蘭山・田村〔藍水〕・太田〔澄玄〕ノ諸先生ノ説各自不同アリ。又和名類聚ヨリ今ニ至〔ツ〕テ猶一ニ決スルモアリ。ココニ於テ予不敏ナリト云〔エ〕ル、幼ヨリ本草ノ学ヲ好〔ミ〕、李氏ガ綱目ニ始〔マ〕リ、諸家本草・府志・県志・物産ニ抱〔キ〕書其餘異境変地ノ異品ニ至〔ル〕マデ、和産ノ品物コレニ充テ穩当ニシテ一ニ決センヲ欲ス。……予自〔ラ〕山野ニ跋涉スルヲ数年、或〔イハ〕園ニ培セ盆ニ栽草木今ニ至〔ツ〕テ二千餘種ニ至ル。一種ゴトニ根茎花実成〔ル〕ヲ見テ其真ヲ写〔シ〕其書七十餘卷、ソノ品凡〔ソ〕一千八百餘種ニ及〔ブ〕。今救荒本草諸家ノ説ヲ編輯シ、其品ノ甘苦形状ヲ親〔シク〕試〔ミ〕テ救荒兼本草ニ併考スルヲ数反而其穩ナル者ヲ存ス。然レモソノ気味形状異ニテ扨ナキモノハ、古説ト云ヘルコレヲ退ケ、新ニ気味相合スル者ヲ以テコレニ充ツ。和漢共ニ異名僅ニ二三ヲ挙ゲテ同名異物ノ淆混ヲ免〔ガ〕

ル。書成〔ツ〕テ救荒本草通解ト云（文化丙子〔十三年 1916〕臘月日書于又玄堂 岩崎常正）とあつて、本書が努力の一大結晶たることが知られる。

左に「野生薑」の文を引いておく。

「野生薑 綱目ニ黃精一名ヲ野生薑ト云。コレト同名異物ナリ。

和名 秋ノキリンサウ アハダチサウ（江戸） キンクハカヅホクサ神田氏 アウレア羅甸 ウイルデケウン和蘭 漢名一

名大葉蒿子江戸志

山野ニ多シ。春宿根ヨリ生ジ、紫苑葉ニ似テ小ニ淡黄綠色。秋月茎高サ二三尺、茎ニ着〔ク〕葉ハ細ノ柳葉ノ如ク鋸齒アリテ互生ス。梢三四寸穗ニナリ、花アリ黄色ニ、形ハンゴンサラニ似〔タ〕リ。後白茹トナリ飛〔ブ〕。葉味辛、艾香アリ。一種漢種劉寄奴ト称スルモノアリ。葉ノ形沢蘭ニ似テ小葉ナク、鋸齒深ク細ノ柳葉ノ如ク、茎ニ互生シ秋花アリ。又アハダチサウト同ジ。氣味モ同ジ。日光山ニ一種アリ。葉ハ柳ノ如ク細長ナルアリ。此三種備急本草滁州劉寄奴、又蘇頌説ノ劉寄奴、黄白花ヲ開ク〔ト〕云〔ウハ〕是也。唐本ノ本草原始ニ図アリ、コレ実ノ形ヲアラウヲ全アワタチサウナリ。救荒ノ図小異アリ。花白花ト云〔ウ〕モ疑ハシ。華本ニ治病本草劉寄奴条下ニ具〔ワル〕トアルヲ見レバ、アハダチサウナリ。〔稻生〕若水キクヤウリウキト訓ズ。不詳。此図ニ從ヘバ、コシホガマ一名ハナヨモギ一名タブリサウ尾州ヨク似タリ。ハナヨモギハ清俗馬矢蒿ト云〔ウ〕。

なお「農政全書」所輯本に欠いた「山櫛樹」の条には、左の如く書かれている。

「山櫛樹

和名カンボク ウアトルフリール和蘭 一名折傷木錦囊秘錄 岐葉繡球五雜俎

樹高丈許、枝葉対生シ、葉牽牛花ニ似テ厚ベ七八尖アリ。又常春藤荒ニ似テ大ニ花又多シ。夏月枝梢ニ衆花攢生シ、白色ニシテ孩児拳頭ノ如ク、後実ヲ結ブ。枸杞子ニ似テ小ニシテ紅色也。○華本ニ此一条アリ。和刻本ニ闕〔キ〕タリ。今コレヲ補フ。

ちなみに蘭山佐伯博先生〔小野蘭山〕口訳『救荒本草辨解』(卷上・下 一冊抄本)は「山檮樹 不知」とし、同じく小野蘭山先生訳説 門人筆記『救荒本草記聞』(上・下二卷 文化辛未「八年」[181]写本)も「山檮樹 未詳」とし、闕名撰『救荒本草會識』(二冊、文政四年「[182]」写本)には「山檮樹 和産未詳」としている。(いづれも杏雨書屋に蔵す。仮名まじり文にて絵図なし。)

(10) さらに一九四六年イギリスの薬物学者 Bernard E. Read が『救荒本草』の英訳をなし、(“Famine Foods Listed in the Chiu Huang Pen T'sao.”) Henry Lester Institute of Medical Research (上海雷士德医学研究所) で出版された。それには、今日識られる野草について、一々その成分の分析がされていると云う(未見。)
(胡道静「我国古代農業發展概況和若干古農學資料概述」『學術月刊』一九六三年四月号、二六ページ)

このB・Eリード(中国名「伊博恩」)は、胡道静氏によれば、長く中国に寓居し、新中国成立前には、上海のイギリス人の経営した雷士德医学研究所(いまの北京西路、旧名愛文義路にあつた)で仕事をしていた。かれは、『救荒本草』を英訳した外、また李時珍の『本草綱目』を訳し、『綱目』中の薬物の図を彩色絵にし、その仕事たるや誠に雄大なものであつたが、惜しいことに完成をみず、一九四九年六月十三日腸癌で没した。その未刊の遺稿は、夫人の韓徳森がホンコンに携行されたという。(一九六四年二月二十八日の書信による)

二 王磐『野菜譜』一卷

撰者は、字は鴻漸、西楼と号す。江蘇高郵の人。その嘉靖三年（1524）の自序によれば、「正徳の間（1506—1521）、江淮が送々水・旱を経、饑民が道路に枕藉し、……率ね皆野菜（野草）を採摘して、以て食に充て、これに頼つて活きる者が、甚だ衆かつた。但し其の間、形類が相似て、美惡が同じでなく、誤つてこれ食つて、或いは生を傷つけるに至つた。……余は……田居して朝夕歴覽詳詢して、前後僅かに六十餘種を得たので、其の象（すがた）を取つてこれを図にし、……かつ其の名に因つて詠を爲つた」とて、本著を撰述するにいたつた所以を説き、ここに野菜（野草）六十種の絵圖を一つ一つ下欄に描き、上欄にはその名とそれに因んだ歌謡と草生の状況・食べ方を示している。『四庫全書總目』の提要は、「其の詩歌は、多く規戒を寓し、謡に似、諺に似て、頗る古質にして誦すべし」としている。

左に巻頭の「白鼓釘」（たんぽぽ）の文を示しておく。

「白鼓釘

白鼓釘。白鼓釘。豊年賽社、鼓不停。凶年罷社。鼓絶声。鼓絶声。社公惱。白鼓釘。化為草。

救飢 一名蒲公英。四時皆有。惟極寒天。小而可用。采之熟食。」

ところで、この書には、どの部分が食えるのか明示していないが、

尤も後に述べる姚可成の『救荒野譜』の前半に、王磐のあげた六十種を引くと共に、その可食部分を誌している。

即ちそれに従えば、「食葉」三十二種、「食茎・葉」二十二種、「食苔」・「食根」それぞれ二種、「食実」・「根苗俱食」それぞれ一種となる。

これには一々採集の時期を掲げている。

たとえば破破衲は「臘月便生。正二月采、熟食。三月老、不堪用」とする。これは、『救荒本草』に見られぬ点である。

さて此の書の初刊本は、識るてがかりが無いけれども、(1)徐光啓の『農政全書』卷之六十荒政(崇禎十二年刊)に附載されるほか、

それには王磐の「野菜譜序」と張綆の跋をのせている。

(2)汪士賢編刻『山居雜志』第七冊(万曆二十一年1593新安汪氏刊)に輯めらる。

わが内閣文庫にこの『山居雜志』を蔵しているが、その第二冊と第八冊(『酒經』・『蔬食讀』・『菌譜』・『野菜譜』を輯む)を闕如していて、見るをえなかつた。

(3)また陶珽重校『說郛』(順治三年1646)兩浙督學周南李際期宛委山堂刊本) 弓第一百六に輯録せらる。しかしそれには、王磐の序も無ければ、張綆の跋も無く、かつ絵図もよくない。

ちなみに『三統百川學海』壬集に輯録せらるというも、未見。

(4)その後、清の咸豐六年(1856)來鹿堂から『救荒本草』とともに重刊せらる(龍伯堅『現存本書書録』一九五七年人民衛生出版社刊一〇六一〇七ページ)。(未見)

三 滑浩『野菜譜』一卷

撰者は、浙江餘姚の人。この書ははじめに、滑浩の二七五字の序文ともいふべきものが見え、そこには「因忤魏忠賢党、被斥家居。因見『野菜譜』一帙、遂各繫以詩、託物寓言、聊備園叟農書之外史」と述べている。本書に誌す野菜六十種、それ

は王磐の『野菜譜』の絵図を略し、配列に若干の変更がある外、本文は全く王磐の文である。

これは(1)陶珽『說郛統』弓第四十一(第一六三冊)(内閣文庫所蔵本)、(2)『古今圖書集成』博物彙編草木典第八十卷雜蔬部藝文二(一一九葉)に、全文が輯録されている。

四 姚可成『救荒野譜』一卷

この書ははじめに、「崇禎壬午〔十五年1642〕清明日蒿萊野人姚可成」の引(序文)あり。そのあと、各ページ毎に一つの植物を充て、上段に文、下段に絵図を掲ぐ。いま巻頭の「白鼓釘」の文を示せば、左の如くである。

「白鼓釘 食茎葉

一名蒲公英。四時皆有。惟極寒天、小而可用。采熟食。

白鼓釘、白鼓釘。豊年賽社、鼓不停。凶年罷社、鼓絶声。鼓絶声、社公惱。白鼓釘、化為艸。」

すなわち此の文は、白鼓釘の下「食茎・葉」の三字を除けば、さきの王磐の『野菜譜』の白鼓釘の文と、全く同じである。もつともその絵は、新規に描いている。今はじめの六十種の草類を検すると、剪刀股の位置が『農政全書』所輯本と相違する(本書では二番目だが、『農政全書』は三十五番目にのす)ほか、王磐のそれに拠つたとみられ(尤も、時に句の後入れ換つたものあり)、さらに「補遺」として、鶏頭根以下草類四十五種、檀以下木類十五種が、同じ体裁で載せられている。

さればわが和刻本は、後述の如く、明の王西樓輯、姚可成補遺『救荒野譜』としている。

いま姚可成の増補した部分をみるに、『周憲王救荒本草』の語が明示されたものに、黑牽牛(『救荒本草』では狗耳艸と

謂う。カッコ内皆然り）・胡椒菜・山牛膝（山萵菜）・蒺藜（粘糊菜）・蠶夷（鐵掃帚）・薺（杏葉沙參）・山茶があり、また産生の地名を挙げたものに、左の如きものがある。

蠶夷（食葉）生陝西諸郡。

苧頭（食葉）生閩・蜀・江・浙。今南直南陵多植之。

南燭（茎・葉俱食）吳・楚山中甚多。

景天（食葉）生太山川谷。

醋筒草（食茎・葉）生湖・湘水石間。

薺草（食実）生東海辺。

鵲不踏（食葉）生江南山谷。

木天蓼（食葉）生蜀中。

なお王磐の『野菜譜』が草類だけに限つたのに対し、姚可成は『救荒野譜』で草類とともに木類におよび、かつ可食部分を一一明示している。即ち草部では、葉二二種、根九種、実四種、茎・葉四種、苗・葉三種、根・苗一種、根・実一種、葉・実一種、合計四十五種、また木部では、葉十一種、根一種、実一種、花一種、根・葉一種、合計十五種である。

すなわち本書では、さきに王磐の六十種を、つぎに之に補足した六十種、計百二十種の救荒植物を図説してのち、附録として晋の劉景先の「救荒辟穀簡易方」一則、唐の孫思邈の「救荒辟穀簡便奇方」四則、宋の黃庭堅の「山谷救荒煮豆法」一則をのせ、それには按語でもつて「煮豆の法を得て以て之に通ぜば、遇うところの草木の件は、口にすべし」としている。

さて此の刊本としては、左の如きものがある。

(1) 元の李杲撰、明の李時珍校『食物本草』崇禎十一年(1638)序刊本の巻首に、『救荒野譜』明、王西樓輯六十種○蒿萊野人姚可成補遺六十種がみられる。そこには、李時珍の「食物論」が加わり、そのあとに孫思邈の「濟饑急救方」四条、劉景先の「辟穀救饑簡易方」、黃庭堅の「煮豆法」の順序で列し、本文の図譜に移っている。

右は、わが内閣文庫に蔵する陳繼儒・李時珍らの序を附する『食物本草』(二十一冊本)による。

(2) つぎに清の張海鵬校梓『惜月山房彙鈔』(嘉慶十七年1812刊)第十集第六十八冊に輯めらる。それには「救荒野譜」の下に「明姚可成輯」とあり、三十一葉の「救荒野譜補遺」の下には、かれの號たる「蒿萊野人輯」と出ている。

(3) これは又、民国九年(1920)上海博古齋から影印されて出る。(龍伯堅『現存本草書錄』一九五七年刊、一〇九ページ)。

(未完)

(4) わが国では、享保元年(1716)松岡恕庵の校点にかかる『周憲王救荒本草』に附して、王西樓輯・姚可成補『救荒筌譜』一卷が、皇都書舖華文軒から出版せらる。(大阪の武田杏雨書屋、西尾の岩瀬文庫、東京の内閣文庫蔵)

この刊本には、正徳乙未(五年1715)伊藤長胤の「救荒野譜補遺序」、同年松岡玄達成章の「合刻救荒本艸野譜序」、同年香川修徳の「救荒野菜譜并補遺序」、王磐の「野菜譜序」、崇禎壬午(十五年)姚可成の「救荒辟穀諸方引」をのせ、そのあとに唐孫思邈の「救荒辟穀簡便奇方」……がみえ、然るのち「救荒野譜」明、王西樓輯六十種 蒿萊山人姚可成補遺六十種」の目次が出てくる。そして本文となり、最後に南湖の張綰の跋(それは『野菜譜』の跋)が載っている。

(5) その後、寛政十一年(1799)小野蘭山(職博)の校補本 明、王西樓輯・姚可成補『救荒筌譜』が、平安書肆 長松堂

から上梓せらる。

この刊本では、王磐の「野菜譜序」が巻末に、即ち張縉跋の前におかれている（大阪の武田杏雨書屋本による）。

内閣文庫にも蔵す。

(6)さらに、小野蘭山の孫職孝が祖父の遺命を受けて、その子職実をして筆録させた『救荒野譜』を、仮名交り文で平易に通解した『救荒野譜啓蒙』二巻一冊が、天保十三年（1832）小野蕙畝著として、書林日本橋山城屋佐兵衛・神田須原屋善五郎から出づ。但し絵図無し。

これは、目録のあとに「小野蕙畝職孝口授、男 彦安職実録」として、草之部 白鼓釘にはじまり、最後に天保十四年田中恵操の跋をおさむ。武田杏雨書屋・内閣文庫に蔵す。

なお徳川時代の学者で本書を研究したものに、蘭山小野先生口授 門人筆記『救荒野譜記聞』一巻（文化辛未夏四月写）、同じく蘭山の『救荒野譜辦解』一巻、『救荒野譜補遺辦解』一巻のほか、岩崎常正（灌園）著『救荒野譜通解』一巻、『救荒野譜補遺通解』一巻（文政三年門人森良章・田村守文校）がある。いずれも手写本で、絵図無し。大阪武田杏雨書屋に蔵せらる。

五 高濂『野菰品』一巻

撰者は、字は深甫、瑞南と号す。浙江仁和人。此の書では「古杭の高濂」と称している。

この書は、かれの『遵生八牋』（万曆十九年1591序刊本）卷之十二 飲饌服食牋 中巻の一部で、野菰^{ソウ}類九十六種について、一々大小の解説をし（但し絵図は無い）、その題下に「余所選者。与王西樓^王遠甚。皆人所知。可食者方敢録存。非王所

扱、有所為而然也」と誌している。（わが内閣文庫に蔵す。なお東京西カ原の農業総合研究所に、別の刊本あり）

因みに後述の『広百川学海』本には、この文章が最後に載せられ、本文の始めに「右」の字があり、終りに「高濂跋」と署している。

いま本文の「野蔴品」から、二、三のものを示しておこう。

蓴菜^{ジュン} 四月采之、滾水一焯、落水漂用、以薑醋食之亦可。作肉羹亦可。

菖蒲 石菖蒲白朮煮為末、每一斤用山藥三斤、煉蜜水和入麪内作餅、熟食。

蕎麥葉 八、九月採初出嫩葉、熟食。

由是觀之、その食べ方もたんに飢を凌ぐ意味のものではなく、多分に「清供」的なものが含まれていることに、注意したい。

なお「王西樓云々」とあるが、高濂のとりあげたものの中、王西樓の『野菜譜』に載っているのは、その半分の三十種に足りない。

因みに『遵生八牋』第十二卷 飲饌服食牋（中）には、この野蔴類九十六種のほか、別に家蔬類六十四種を誌している。

なお内閣文庫の『遵生八牋』には、万曆辛卯（十九年）の屠隆・李時英・高濂の序を掲ぐ。

高濂の『遵生八牋』から引き出された『野蔴品』一卷は、(1)明の屠田叔（本峻）重定『山林經濟籍』（明、自娛齋刊）奉養第五、第八冊（内閣文庫蔵）や、(2)馮可賓輯『広百川学海』癸集第四十七冊、および(3)陶珽輯『說郛統』写第四十一、順治三年（1646）刊に輯録せらる。

なお(4)清の湖南漫士輯『水辺林下』清刊本におさむというも、未見。

さて上記『山林經濟籍』・『広百川学海』・『説郭統』にのる「野藪品」は、いずれも同一板木によつてゐる。しかし『広百川学海』本は、内閣文庫や京都大学東洋史研究室のものは、『山林經濟籍』本同様、「古杭高濂輯 屠本峻校閲」の字が、はじめに見られ、また十四葉に「高濂跋」の文章(三十五字)が存する。ところが、京都大学人文科学研究所の所蔵本は、どうした訳か知らぬが、「屠本峻校閲」の五字が削られると共に、十葉ウラの「商陸」のところで終り、そのページにあつた「牛膝」の部分が削りとられ、十一葉以下が脱けているから、結局六十八種しか載つていない。なお版は、あとずりでわるい。いつぼう『説郭統』のそれは、人文科学研究所の蔵本に拠つたが、これは十四葉完全にそろつてゐるが、最後のところに出てくる「高濂跋」の文章が削りとられている。

この『広百川学海』の異同については、倉田淳之助君から教えられ、實際に対比してみても、おどろいた。北京農業大学の王毓瑚教授が『中国農学書録』(一九五七年刊、一一八ページ)で、『広百川学海』に収めるものは、「節本」(省略本)だとされたが、王君また此のあとずり本に拠られたのであらう。

六 周履靖『苺草編』四卷

撰者は、字は逸之、梅墟山人または梅癩と号す。浙江嘉興の人。

この書卷之一は、李日華の「茹草解」、張之象の「殭英歌」を掲げてのち、荷花・紫草等四十九種の草類の図を描いて、一々これを詠じ、かつ採取の時期や其の食べ方を述ぶ。(三十八葉、半葉九行、一行十八字)

卷之二は、張服采の「采芝歌」、皇甫汈の「烹葵歌」を引いてのち、倒灌蒿等五十二種を図説し、以て「本草の遺佚を補

つてゐる。」(二十九葉)

卷之三は、茹草紀言とて、茹草のことと關係ある古語を撫つて列記し、(二十五葉)

卷之四は、茹草紀事とて、同じく古語より撫つてゐる。(二十九葉)

ここに彼が卷一と卷二で採り下げた草類一〇一種について、一言すれば、其の体裁は、前述の王磐『野菜譜』に似、下半に絵図をのせ、その左側に短い解説を附し、下半には歌詠を掲げている。いま「蒲公英」(たんぽぽ)の項をあげておく。

「蒲公英

春山明春水平 黏天芳草夾畦 青蒲公英蒲公英 春日易陰晴 江鄉社鼓鳴 黃蜂粉蝶時輕盈

一名白鼓釘。四時皆有。惟寒天嫩而可食。採取油塩椒炒。」

そして此の一〇一種のうちには、王磐のその五八種(菱科・薺菜兒の二種を欠く)が輯められている。

この書は、前に万曆壬午(十年1588) 同里の彭輅の序あり、あとに万曆丁酉(二十五年1597)の自跋が見られ、かれ周履靖の編輯する『夷門広牘』食品十六・十七冊に輯めらる。なお涵芬楼影印本がある。

七 鮑山『野菜博録』三卷

撰者は、字は元則、在齊と号し、自らは香林主人と署す。江西婺源の人。

この書は、天啓年間(1621—1626)彼が黃山の白竜潭上に室を築き、七年間つぶさに野蔬の諸味を嘗めて著録したもので、合計四三五種の草木について、一々絵図を掲げて、これに性味(性状)と食法(調製法)を示している。すなわち草部卷上では、葉の食えるもの一四〇種をのせ、草部卷中では、葉の食えるもの七六種(以上計二一六種)、茎の食えるもの三種、茎・

葉の食えるもの二種、根の食えるもの二八種、実の食えるもの二四種、花・葉の食えるもの四種、葉・実の食えるもの二〇種、根・花の食えるもの二種、根・葉の食えるもの一四種、根・実の食えるもの三種、（以上、草部合計三一六種）を載せ、木部卷下では、葉の食えるもの五九種、花の食えるもの五種、実の食えるもの二五種、花・葉の食えるもの三種、葉・実の食えるもの一九種、花・葉・実の食えるもの五種、葉・皮・実の食えるもの三種、（以上、木部合計一一九種）を示している（「総目」に拠る）。

いま「紫豇豆苗」を例示すると、中央に大きくその絵図を示し、左の隅につぎの如く誌している。（これは、『救荒本草』米穀部の十六番目に見ゆ）

〔紫豇豆苗〕 人家園圃中種之。莖葉与豇豆同。但結角色紫。長尺許。味微甜。

〔食法〕 採嫩苗葉、燂熟。油塩調食。

すなわち絵図は、新規に描かれているが、『救荒本草』のそれに比して見劣りがある。そればかりか、その文章は『救荒本草』から借りて来、「救飢」とあるのを「食法」と改め、かつ其の後段の二〇字を省略したものである。

また王西樓（鶴）の『野菜譜』については、鮑山の序に出て来るが、叙述の点ではその引文は原型では出ていない。

再びこれを朱橚の『救荒本草』と一々対照すると、両者共通のもの三八八種、『野菜博録』で追補せるもの四七種、これに闕くもの二六種となる。そして先に述べたごとく、両者共通のものの文を対比すると、『野菜博録』のそれは、『救荒本草』を抄録したものの如く、一般に簡単であり、その産生地を示すに「処処有之」・「生田野中」・「生山野間」・「生荒野中」・「生于湿地」・「人家園圃多種之」などと誌するものが多く、例外的に河南・四川地方の地名が出てくる。

ちなみに『救荒本草』の場合は、一々産生する土地の名を示し、一般に何処にも見られるものに対しては、「生田

野中」などの語を以てしている。

ところで、『野菜博録』に地名の誌された十一種（蕎麦・黄鵪菜・山菜豆・椒樹・蕤核樹・石岡橡・拐棗・山藟・木桃児樹・婆婆枕頭・山繸）の文は、「椒樹」の文が抄録されたばかりは、全部『救荒本草』に依拠している。すなわち彼の自序のなかで「社友潘禪春の出した関中王府の抄本『備荒本草』」と語つたものは、この『救荒本草』を指したものであらう。つぎに両者共通のものも、その配列がちがつており、とくに若干の植物について、その分類を異にするものが見られる。

すなわち驢駝布袋は、『救荒本草』では木部の実可食におさめられ、それは「生鄭州沙崗間。科条高四、五尺。……結子如菉豆大。……熟則色紅、味甜」とし、「採紅熟子食之」とあるが、『野菜博録』は、草部の葉可食におさめ、「生山野間。苗高二、三尺。葉似郁李子、葉頗大、光沢、对生」云々とし、食法で「採嫩芽、燂熟淘去苦味、油塩調食」としており、先の文のあとに、「結子如菉豆大。……熟紅味甜」の語があるが、「食法」のなかには、熟した実に触れていない。（ちなみに、清の呉其濬『植物名実図考』卷三十四木類に、之をおさめている）

また婆婆枕頭は、『救荒本草』では木部実可食にはいつてゐるが、『野菜博録』は、前者の全文を引きながら、木部葉実可食のなかにおさめ、青岡樹も前者は木部葉可食に入れているが、後者は前者の文章を抄録しながら、木部葉実可食にいれてゐるのは、どうしたことか。

さらに老婆布靴も、『救荒本草』では木部葉可食にみえるが、『野菜博録』は前書の「救飢」の全文を「食法」に引きつつも、木部実可食に入れている。

それから吉利子樹も、『救荒本草』は木部実可食にはいつてゐるのに、『野菜博録』は前書を抄記し、「食法」で「摘熟子食之」としながら、木部の花葉実可食に入れている。

また草部でも、蕎麦苗・山黑豆・黄豆苗・赤小豆・油子豆・刀豆苗・紫豇豆苗・豇豆苗・眉児豆苗・蘇子苗は、『救荒本草』は葉実可食としているが、『野菜博録』は前書の文章を抄録しつつ、葉可食のなかにいれているのもおかしい。(例えば蘇子苗の「食法」には、「採嫩葉燂熟、換水淘洗淨、油塩調食。子可炒食、亦可葉油」とある)。

また絲瓜苗は、『救荒本草』は草部実可食のところで「救飢 採嫩瓜切碎、燂熟。水浸淘淨、油塩調食」と書いているが、『野菜博録』は、「食法」で上文の「嫩瓜」を「嫩葉」に改めて、葉可食のなかに入れているが、これも前者の方がよい。

また茅草根は、『救荒本草』は草部根笋可食におさめているが、此の書では「食法」に前書の救飢の文を抄録し、「採嫩芽剝取嫩穰食。取根啗食」と述べ、これを草部根可食に入れている。

以上、一々両書を対比すると、『救荒本草』の方に軍配があがる。

さて此の書は、天啓二年 (1622) に出たが、稀覯本に属する(未見)。尤もその影印本が二種類出ている。一つは、一九三五年国学図書館陶風楼が、館藏本(注氏舊蔵 樓旧蔵)を影印したもの。はじめに香林主人(鮑也)の序をのせ、総目あり、本文のあとに趙洪中および程大中の跋を輯む。そして其のあとに『四庫全書総目』の提要とともに、柳詒徵の跋を附している。

ところで、此の四庫提要は、『野菜博録』四卷 浙江鮑士恭家藏本…分草部二卷・木部二卷…自序記所得凡四百数十種而是編所載僅二百六十二種。蓋又有所去取歟」としている。しかし之を悉細に調べると、鮑士恭の進呈本は、本書の中巻を闕如しており、そして上巻の野茴香以下を第二巻とし、下巻の藤花菜以下を第四巻としたものである。

も一つの影印本は、一九三六年上海涵芬楼(商務印書館)が北平図書館所藏(明、鳴野山房旧蔵)の天啓二年序刊本を影明代における救荒作物著述考 天野

印して、『四部叢刊』三編子部（二一八・二二〇冊）に輯録している。これは、前の国学図書館影印本と同じ版本で、鮑山の序・目録・本文のあとに、程大中・趙洪中の二氏の跋をのせて、最後に趙萬里の跋を附し、それには上掲の『四庫全書』本の『野菜博録』には、刀豆苗の次ぎに嬾翠蒿と秋水角苗がはいつて卷二が終わり、菴摩勒の次ぎに老兒樹が挿入されているが、これは明刊本に見られぬもので、此の三つはのちにこれを補つたものであらうと、趙氏は述べ、この三つの絵図と文章を程・趙二氏の跋のあとに附載している。

八 屠本峻『野菜箋』一卷

撰者は、字は田叔、浙江鄞県の人。

この書について、かれ自ら言う、「予は四明（鄞県すなわち寧波）人なり。四明の野菜にして王（磐）・周（履靖）両君のと同じきものは収めず。其の異なるもの二十二品を収めてこれを詠ず。四明に産するところに非ざるものは、曰く藟荷。種蒔して灌漑を煩わさざるものは、曰く甘菊・日露・芫荽。灌漑種蒔して成るものは、曰く雪裏蕓・香芋・落花生・芋禾・蹲鴟と。」

ちなみに書中、「日露」の記事無し。

以下、荏・萱・芹・草決明・椿芽・薇・蕨・百合・金雀芽・甘菊芽・玉環菜・薯蕷・落花生・香芋・藟荷・雪裏蕓・芋禾・蹲鴟・香棟腦・梔子花・楨桐芽・芫荽について述べている。いま荏の文を示しておく。

「荏

物生無種。惟菌与芝、採之掇之、可以療饑。南山有蕨、西山有薇。与爾栖遲、飽餐是宜。」

この書は、明の陶珽輯『說郛統』巻第四十一（順治三年宛委山堂刊）に輯めらる。（六葉）

附 顧景星『野菜贊』一卷

これは、清朝に入つて撰述されたものだが、ここに附記しておく。

撰者は、字は赤方、黄公と号す。湖北蘄州の人。明末の貢生で、清の康熙時に鴻博に薦挙されたが、病を以て辞す。

この書の「小識」によれば、「壬辰（順治九年1652）帰里、値ニ歲饑饉、偕婦於野採ニ草根実苗葉、得以不死。因各為之贊、凡四十四種」と。すなわち四十四種の野菜につき、一々その性状と食べ方などを誌している。

この書は、『昭代叢書』丁集新編、道光中吳江沈氏世楷堂刊本におさむ。

む す び

以上、明代にみられる救荒植物についての專著を述べて来たが、そのうち朱橚の『救荒本草』、鮑山の『野菜博録』が注目に値する。前者は初刊本は勿論、李濂の嘉靖重刊本もなかなか見難いが、徐光啓の『農政全書』にはそれと王磐の『野菜譜』さえ輯録され、徳川時代にこれが翻刻もされ、研究もされて来た。尤も近年この嘉靖重刊本の影印本が、容易に入手できるにいたつたが、しかし徐光啓の「附語」は捨て難いものがあるから、併読を必要とする。

また後者の『野菜博録』も、戦前、明刊本が二種類も影印され、とりわけ『四部叢刊』三編子部に輯められたものが、役に立つであらう。

（大阪市立大学教授）